春よ、来い

二

戦後篇

橋田壽賀子

春よ、来い

二

戦後篇

橋田壽賀子

NHK出版

春よ、来い（二）……戦後篇
1995年2月20日　第1刷発行

〔検印廃止〕
著者……橋田壽賀子

ノベライズ……三原庸子
発行……日本放送出版協会
東京都渋谷区宇田川町41-1　〒150
電話　03-3464-7311
振替　00110-1-49701
印刷……大日本印刷株式会社
製本……株式会社石津製本所

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。
㊐〈日本複写権センター委託出版物〉
本書の無断複写（コピー）は、著作権法上の例外を除き、著作権侵害となります。

©1995 Sugako Hashida　Printed in Japan
ISBN4-14-005194-9 C0093

春よ、来い

二

戦後篇

NHK出版

装画……中島千波
題字……榊莫山
装幀……芦澤泰偉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

再出発 5
選択 94
挑戦 180
父と娘 239
転機 279
母の死 347

再出発

「ただいま帰りました」

『あけぼの寮』へたどり着いた春希は、誰もいない玄関で声を張り上げた。この寮へ入ったときからの習慣が、無意識のうちにそうさせていたのだった。大阪から立ちっぱなしですし詰めの列車に揺られて来たので、春希の顔は煤けて疲れ切っていたが、目だけはきらきらと輝いていた。

この寮を去ってからの半年間は、春希ばかりか日本という国そのものを激変させたのだったが、玄関のたたずまいは何も変わってはいなかった。

大きな荷物を引きずるようにして春希が廊下へ上がったとき、奥から寮監の里村が顔を覗かせた。

「春希さま?」

「先生ッ……」

駆け寄って来た里村は、抱き寄せるように春希の手を握り締めた。
「よかった。ご無事で……」
「先生も……」
生きていることを確認するかのように春希を眺めてから、里村はようやくやさしい笑顔を見せた。
「よく帰っていらしたわねぇ……」
「先生にお便りいただいて、……ほんとにありがとうございました」
「お便り差し上げても、着くかどうか心配してたの。じゃ、お宅の方は何でもなくて」
「いえ、焼けました。でも、母が世話になっている伯母の家へ転送されて来て」
「そう。じゃ、大変だったのね、春希さまも。……よく、復学なさったわねぇ」
「焼け出されて、私、いるとこなくて、……お寮舎なら、置いていただけますから」
本音を冗談にして笑うと、里村も笑いながら何度もうなずいた。空襲で焼け出されながらも明るく復学して来た春希を、里村は心から歓迎してやりたかったのだ。
「お寮舎も校舎も、みんな無事だったんですねぇ。……お陰で、私はここから新しい時代を出直すことが出来ます。……ここも焼けてしまってて復学出来なかったら、私どうなるのか、何をすればいいのか、わからないところでした」
「これからやっとあなた方も、人間らしく生きられるときが来たの。みんなで頑張りましょう。さ、

お部屋でゆっくりあそばせ。前のお部屋、そのままになってますから」
「はいッ」
春希は再び大きな荷物を持ち上げた。そうなのだ。里村の言うように、これからは人間らしく生きられるのだ。引きずるようにして運んで来た荷物が、急に軽くなったように思えたのだった。
春希は里村と一緒に、部屋へ入った。
「ああ、やっと帰って来た。……出て行ったときと何も変わってない」
春希は感激していた。懐かしさが込み上げていた。
「……このお寮舎へは、二度と帰って来られないような気がして別れたのに、こんなに早く帰って来られた。……この半年の間にいろんなことがあったなんて、嘘みたい……」
「そうね。半年前には想像もしていなかったようなことになって。……でも、アメリカ軍の占領下になっても、どこの学校もちゃんと再開されるんですもの。戦争してたときより、ずっといい世の中になるんじゃないでしょうかねぇ」
春希は期待を込めてうなずいていた。それから、同じ部屋だった則子や千加子のことを尋ねた。
則子の消息はつかめず、千加子は元気だったが、食糧難の上に進駐軍のいる東京は危険だからと、父親から復学の許可が下りないのだという。
「東京へ出るのが怖いって方、まだ多いのね。今お寮舎へお帰りになってるのは、春希さまも入れ

て五人だけ。みなさんが帰っておいでになるまで、このお部屋、一人でのんびりとお使いあそばせ」

里村はそう言うと、部屋を出て行った。

〈一人きりだなんて、……みんなの顔が見られないなんて……〉

勢い込んで出て来ただけに、落胆も大きかった。だが、自分を奮い立たせるように気合いを入れ、ふとんの入っている押し入れを開けた。

かすかにかびの臭いのする重い空気が流れ出して来て、春希は手を止めた。押し入れの中には、東京の大空襲の後、送り返すことも出来ずに置いて行ったふとんと荷物がそのまま詰まっていて、戦争中の息苦しいほどに張り詰めた空気がまだ残っているような、そんな気がふとしたのだった。

春希はふとんを引っ張り出して庭へ運び、干し場の物干し竿に掛けた。

「春希さま、帰っていらしたの?」

振り向くと、お主婦さまをしていた朝子と補佐役の令子が立っていた。

「またお世話になります。よろしくお願い致します」

上級生の顔を見ることが出来て、春希はホッとして、丁寧に頭を下げた。

「けど、帰って来るの、ちょっと早すぎたみたい。……とにかく、食事のひどさときたら、ただごとじゃないの。食糧の配給がないんだから仕方ないけど……」

朝子がうんざりした顔で言うと、令子も大きくうなずいている。二人の様子から、ここでの食事

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

は予想以上にひどいのだろうと覚悟したが、「お炊事当番、一緒にお願いしますね」と言われ、「はいッ」と元気に返事をしていた。寮に帰った実感が、また新たに湧いていた。

それから春希は部屋のほこりを払って畳を拭き、いつも則子たちとそうしていたように、部屋中をピカピカに磨き上げた。だが今は、「きれいになったわねぇ」と見交わす顔はなかった。

ため息をついた春希は、大の字に寝転んで天井を見た。入寮した当時、この部屋で四人が一緒に寝起きすると聞かされて息苦しさを感じたものだったが、今、一人のこの部屋はひどく広く思えて淋しかった。だが、やっと自分の落ち着く場所を見つけたという思いも強いのだった。

春希はその日の夕食から、東京の食糧難の凄さを実感させられた。三日分の食糧の配給がさつまいもとかぼちゃだけで、お米は一粒もないというのだ。蒸したさつまいもとほとんど味のないかぼちゃの煮付けでは、空腹のために眠れないのだった。

こんな飢餓状態の中で、せめて素晴らしい講義さえ聴けたらと、春希は授業の開始を待ち焦がれていたが、始まってみるとそれも失望の連続だった。出席する学生数が少なくて、休講になることが多かったのだ。寮のひどい食事と休講続きでは、何のために復学したのかわからないと怒りさえ覚えたが、帰る家のない春希は、寮で我慢するより他になかったのである。

それでも神田由子と再会出来たことは嬉しかった。

「小説は書いてらっしゃるの?」

春希が訊くと、由子は首を振った。

「あんまり世の中が変わりすぎて、……その度に自分も変わって行って、……もう少し落ち着かないと、自分の生きて来た意味さえわからないから……」

「由子さまはいいわねぇ、ご自分のなさりたいことが決まっていらっしゃるから。……私なんて、講義でも聴くより他に、今、することがないの。でも、講義がないからって、また大阪へ帰るってわけにもいかないし……」

そう言いながら、春希はつくづくわが身を情けないと思うのだった。

それでも春希は、リュウへ宛てては、元気で頑張っているという手紙を出していた。コウ伯母さんの家で肩身の狭い思いをしている母に心配はかけられないからだった。そしてリュウからは、平吉だけが疎開していた山形から東京へ帰ったという手紙を受け取ったのだった。

〈伯父さん、帰ってたんだ〉

春希は早速外出の支度にかかっていた。すぐにでも、平吉のやさしい笑顔を見たかったのだ。

どうにか長坂酒店のあった辺りへたどり着いた春希は、今更ながら空襲の恐ろしさを実感していた。一面の焼け野原で、その焼け跡にはトタンや焼け焦げた木や板が散乱しているだけで、人が住めそうなものは何もなかった。平吉が出て来ているとしても、こんな焼け野原に野宿しているとは思えなかった。

春希が諦めて寮へ帰ろうとしたときだった。足元にあった焼け焦げた大きなトタン板が動いたのだ。驚いて飛び退くと、男の首がニョキッと出て来て、震えている春希を見上げた。

「……伯父さん!?」

「えッ？　……春希ちゃん？　……春希ちゃんかッ。……ああ、びっくりした……」

「びっくりしたのは、私の方よ」

上へ出て来た平吉は、「東京へ出て来てたのか」と、動悸の治まらない春希に訊いた。

「学校が始まったから。ここ、何なの？」

「防空壕さ。結構、中は広いんだよ」

「前に、伯父さんと伸三さんが掘ったって聞いて見せてもらった、あの防空壕？」

「ああ。空襲のときは中へも火が入ってしまって、全然役には立たなかったけど、これでも立派に雨露はしのげるんだ」

「へえ、今ごろ役に立ってるんだ」

春希が中を覗こうとしたとき、防空壕の中から女が顔を出し、平吉に「誰？」と訊いた。

平吉は一瞬戸惑いを見せたが、思いがけない成り行きにまた驚いている春希を見て、「うちの奥さんの姪です」と、その人に春希を紹介した。その人は「あらッ」というように防空壕から出て来て、春希をジロッと見た。三十歳も半ばくらいの年ごろの人だった。平吉はその人に丁寧に頭を下げる

と、「手伝っていただいて、ありがとうございました。またよろしくお願いします」と、妙によそよそしい口調で挨拶してから、防空壕の中へ、「健坊、ゆかりちゃん、お母さん帰るって」と呼びかけた。すると、六、七歳の男の子とその妹らしい女の子が上がって来た。

春希に、平吉は照れ笑いしながら説明した。

「この近所で小料理屋やってた人の奥さんと子供でね、やっぱり元の所で防空壕暮らししてるんだ。伯父さん、旦那と友達だもんだから、伯父さんが一人で帰って来てるのを心配して、ときどきああやって女房よこしてくれてさ。子供までくっついて来るから、こっちとしてはありがた迷惑でもあるんだけど、といって、女房が一人で来るっていうのも、旦那にしたっておかしなもんだろ。子連れも仕方ないよね。それに、手伝ってもらうったって、たかが防空壕暮らしだ。たいしてしてもらうこともないのにさ、今も、昼になったら昼飯食ってけってことになっちゃうし、……来てくれない方がいいんだけどさ、友達の親切、むげに断るわけにもいかないでしょう。もっともあちらは、うちが食糧持ってるの知ってて、女房と子供たちが一食だけでも食べられたらっていう腹もあって来るんだから。……親切ごかしに一食稼ぎに来られる方は、たまったもんじゃないよね」

妙に弁解じみた言葉を長々と聞かされて、春希は平吉の顔を見詰めた。

「いやだなあ、春希ちゃん、信じてないんだぁ。伯父さんが一人で帰って来て、変な女引っ張り込んだとでも思ってるんでしょう。私にそんな甲斐性があったら、とっくに伯母さんなんかとは別れ

ちまってますよ。私はこの世で伯母さん以外に好きな女なんていないの。伯母さんに誤解されるようなことなんか、言わないでよ、春希ちゃん」

「……」

春希が呆れているうちに、平吉は話題を変えた。

「けど、いつ東京へ帰って来たの？　また学校始まったの？　また寮へ戻ってるの？」

「ええ、十月の初めから」

「じゃ、食べるものなんてないんじゃないの？　おなか空いてるんだろ？　今すぐご飯炊いてあげる。私たち、ちょうどお昼済んだとこで、炊いてあったご飯みんな食べちまったから」

急いで防空壕へ入ろうとする平吉を、「そんなつもりで来たんじゃないから」と春希は止めた。

「伯父さんが帰って来たっていうから、懐かしくて、ちょっと顔を見に来ただけなの」

「お米はね、山形から持って帰ったのがまだあるから。さ、ここに」

平吉は春希をそばにあった石に座らせると、自分だけ防空壕の中に入って行き、飯盒（はんごう）にお米を入れて戻って来ると、焼けただれた用水桶の蓋を開けて水を汲み、飯盒に入れた。

「ほんとにお米なんだ」

久しく米粒を見ていなかった春希は、嬉しくて思わず声を上げていた。

「すぐ炊けるよ。燃料なら、周りにいくらでもあるしね」

平吉は木切れを拾い集めると、即席の石ころのかまどで上手に火を焚き始めた。
「木で炊いた飯盒飯ってのは、こたえられないよ。こんなうまいもの、ないからね」
「お米、研がないの？」
「洗ったら、せっかくの栄養が流れちまうじゃないの。糠には大事な栄養がいっぱいあるんだから」
そう言いながら、平吉は慣れた手つきで上手に火を焚いている。
春希は感心してそれを見ながら、訊いた。
「けど、どしてこんな不自由な暮らしをしに、わざわざ一人で帰って来たの？　水だって、汲みに行ってるんでしょう？　山形にいたら、のんびりしてられるのに」
平吉は火から目を離して春希を見ると、にんまりしてから、「春希ちゃん」と真顔で呼んだ。
「春希ちゃんは、私が伯母さんのいないとこで羽伸ばして、女遊びでもするつもりだと、勘ぐってるんじゃないの？　失礼だよ」
「いやだぁ」と、春希は笑った。平吉が変に女にこだわってるのがおかしかった。
「伯父さんが一人でこだわってるんじゃない。誰もおかしいなんて、思ってないわよ」
「私はね、早くここにみんなで暮らせる家を建てたいんだよ。それには、私が先に帰って準備しなきゃあさ」
「こんなとこに、また住むの？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com